

抗血小板製剤が原因と思われる閉塞性肝障害に異常リポ蛋白を生じた 1型糖尿病の1例

加藤 純子¹、桑原 隆²、山田佐和子²、藤田阿也加³、松島 由美³、
西 重生¹
(大阪府済生会茨木病院 内科(糖尿病・内分泌内科)¹ 腎臓内科² 消化器内科³)

16歳から蛋白尿を呈し、慢性腎臓病があり、3年前に糖尿病も指摘され、1年前に1型糖尿病と診断され加療中であった58歳の男性が、重篤な肝障害をきたし紹介入院となった。2か月前に塩酸チクロピジンが開始されていた。入院後、すべての内服薬を中止したが、t-bilは22.0mg/dlまで上昇した。入院前TC 200mg/dl程度であった脂質は著明高値を示し、t-bilが改善しはじめたのちも、TC 942mg/dl、LDL-C 101mg/dl、HDL-C 438mg/dl、TG 298mg/dlとHDL-C 438mg/dl、TG 298mg/dlと脂質は増加しており、HDL-C著明高値を示した。106病日によようやくt-bil 1.5mg/dl、TC 288mg/dl、LDL-C 114mg/dl、HDL-C 134mg/dl、TG 44mg/dlとなった。28病日のアガロース電気泳動で、通常の脂質のある位置よりも陰極よりに、全体の60%にあたるバンドの出現を認め、異常アポ蛋白Lp-Xと推定された。59日目には消失していた。

チクロピジンは日本人の5人に1人が欠落しているといわれているCYP2C19により活性代謝物に変換されるため、肝障害をきたしやすく、臨床経緯から今回の閉塞性肝障害の原因と推定した。

脂質の異常高値を示し奇異な経過を辿り、治療、評価に難渋した。